

改訂構造拘束度尺度の 妥当性に関する追加検証

高 沢 佳 司 (皇學館大学)

〈要旨〉 改訂構造拘束度尺度 (SSBE-R) に関する研究によって尺度の妥当性のいくつかの側面、特に内容妥当性、併存的妥当性、臨床的妥当性、および因子の妥当性が確認されてきている。しかし、以下のような未解決の課題が2つ残されている。(a) 併存的妥当性に対する追加的証拠として、SSBE-Rはフォーカシング的態度を予測するか、(b) SSBE-Rは予測的妥当性を有するか、すなわち、この尺度の得点は後の時点で測定された解離症状と相関しているかどうか：これらの問いを解決するため、2つのアンケート調査を4週間間隔（1度目の測定：研究1、2度目の測定：研究2）で実施した。研究1では145名の参加者がSSBE-R、FMS-18、ネガティブな反すう傾向尺度に回答した。その結果、いくつかの例外はあるもののこれらの尺度と下位尺度のほとんどの項目が有意に相関することが明らかとなった。研究2では1度目と2度目の両方に回答した131名を分析対象とした。その結果、1度目のSSBE-Rの得点と4週間後の解離症状との間に有意な相関が見られた。したがって、SSBE-Rの併存的妥当性のさらなる証拠を提供することに加え、予測的妥当性が確認された。本研究の理論的貢献、研究の限界、および将来の方向性について議論を行った。

〈キーワード〉 改訂構造拘束度尺度、妥当性、構造拘束的な体験様式、フォーカシング的態度

緒言

現在まで心理療法の研究領域では、クライアントの体験をその人自身がどう捉えるかのみならず、治療者がどう捉えるかについても多様で豊かな議論が行われて来ている。中でも体験過程理論によると、我々の体験は内容（content）と様式（manner）に大別される（Gendlin, 1964, p. 21）。さらに体験様式はそのあり方によって過程進行中（in-process）と構造拘束的（structure-bound）に分類される。前者は「体験過程が象徴との絶えざる相互作用のもとに自己の中でいきいきと作動している」（末武, 1986）様式であるのに対し、後者は「体験過程の暗黙の機能が欠損してプロセスを排除した構造だけが存在し、体験過程が構造化され、また次第に構造そのものとなる」（Gendlin, 1964, p. 23）様式である。本研究ではこの構造拘束的な体験様式に着目し、その測定ツールである改訂構造拘束度尺度の妥当性に関する踏査的研究を行う。

構造拘束的な体験様式

構造拘束的な体験様式は他の様々な心理学的変数との関連性が指摘されている。例えば、Gendlin（1964, p. 33）は夢、催眠状態、精神病、毒物や薬物中毒状態、感覚遮断、幻覚においても体験は構造拘束的であるとした。また、トラウマを抱えているクライアントの体験は過去の出来事を「反復」して再体験（Scharwächter, 2005）する意味で、構造拘束的である。その他にも、うつ（Geiser, 2010）、幻覚様体験（Prouty, 2004）との類似性も指摘されている。このように、元々は哲学的な概念であった構造拘束的な体験様式を、心理学的現象と結びつけて捉える研究の流れが見られる。

心理学的概念との関係性を調査するためのツールとして、人格特性レベルで個人の体験がどの程度構造に拘束されているかを測定する構造拘束度尺度（the Scale for Structure-bound [Experiencing]¹, 高沢・伊藤, 2009）が開発された。全 13 項目から構成され、反復性因子 8 項目、傍観性因子 5 項目であった。項目の選定に際して、Gendlin（1964, p. 21-23）が述べた体験様式の 6 主徴をもとに多数の質問項目案が考案され、そこから因子分析を経て 13 項目に

1 大括弧内は筆者による追記

改訂構造拘束度尺度の妥当性に関する追加検証（高沢）

絞られたものである。反復性とは「ネガティブな経験が心の中で繰り返されること」、傍観性とは「経験の暗黙的機能が停止すること」（Takasawa, Kaneda, & Tsuda, 2019）である。このオリジナル版の尺度の妥当性については、内容妥当性の他に併存的妥当性の検証が行われている。また信頼性については内部一貫性（ α 係数）の指標で確認されている。この構造拘束度尺度を用いた実証科学的知見からは、構造拘束度と抑うつや反すう傾向（高沢, 2016, Study 2）、精神健康度や幻覚様体験（高沢・伊藤, 2009）、自己効力感（Takasawa & Ito, 2011）、日常生活におけるフォーカシング的経験（上西, 2012）といった、パーソナリティ要因、精神健康度指標、態度との相関関係が見られた。同様に、構造拘束度は自己と表象との心理的距離を予測することが明らかとなっている（高沢, 2016, Study3-7）。さらに、上西（2012）においてはオリジナル版の因子構造が再現されているが、これは構造拘束度尺度の因子的妥当性が示されたことを意味する。

続いて、高沢（2018）は構造拘束度尺度を改訂（the Scale for Structure-bound Experiencing-Revised; SSBE-R）し、傍観性を5項目から8項目に増やし、既存の反復性8項目と合わせて16項目とした。傍観性はオリジナルの尺度では項目数の少なさのためか信頼性係数（内部一貫性） α が反復性と比べて低かったが、改訂構造拘束度尺度では α の値が改善した。なお高沢（2018）で確認された妥当性については内容妥当性、基準関連妥当性（併存的妥当性）、臨床的妥当性であった。具体的には、構造拘束度と精神健康度、幻覚様体験、自己効力感、問題との距離を取る方略との相関関係が見出された。また、高沢（2018）においても理論的に想定された因子構造と因子分析による因子構造が一致した。このことは、尺度の因子的妥当性が確認されたことと同義である。信頼性については内部一貫性に加えて再検査信頼性も確認された。

妥当性の追加検証の必要性和本研究の目的

これらの知見を踏まえると、オリジナル版・改訂版ともに構造拘束度尺度の妥当性・信頼性は一定程度確認されたと言えよう。しかしながら、構造拘束的な体験様式と理論的な関連性が予測される他の変数との関連性については未検

改訂構造拘束度尺度の妥当性に関する追加検証（高沢）

討の部分があり、併存的妥当性をさらに検証することが求められる。同様に、予測的妥当性については未検討のままとなっている。尺度の利用可能性をさらに拡大するためには、これらの妥当性に関しても確認することが望ましい。

まず併存的妥当性の追加検証についてであるが、フォーカシング的態度とSSBE-Rとの相関関係の検討は未解決のまま残されている。フォーカシングはGendlin（1981）によって考案された技法であり、身体の内部感覚に持続的な注意を払うことによる自己理解の方法である。フォーカシング的態度とは「からだに注意を向けながらゆったりとした心構えで待つといった、ある種の態度」（福盛・森川，2003）である。また中谷・杉江（2014）は日常生活におけるフォーカシング的態度を「日常的に自己の内部に流れる曖昧な感覚（フェルトセンス）に触れ、それらに対して適切な距離を取り、言語やイメージによる象徴化過程を経て、受容的で共感的な姿勢のもとに、行動を表出しようとする態度」としている。これらフォーカシング的態度はいわば過程進行中の体験様式に親和性が高いものと考えられる。この背景要因として考えられるのは、フォーカシングの一つの役割として個人の体験過程を推進させることである。前述の末武（1986）による説明の通り、体験過程が進行中の際には「象徴との絶えざる相互作用」が生じ、結果的にはフォーカシング的態度によって描き出されたような状況が導かれることは想像に難くない。逆に、過程進行中の体験様式と真逆の構造拘束的な体験様式は、フォーカシング的態度とも真逆の関係性があると捉えられる。前述のGendlin（1964, p.23）のように「体験過程の暗黙の機能が欠損してプロセスを排除した構造だけが存在」する中では、自己の身体感覚へと注意を向けてゆったりとした心構えで待つこと、フェルトセンスに触れること、適切な距離を取ること、象徴化、受容的・共感的な姿勢のもとに行動すること、等のうち1つとして実現できない、もしくは非常に困難であると考えられる。これを支持する知見として、上西（2012）は日常生活におけるフォーカシング的経験尺度（Focusing Experiencing Scale: FES）とオリジナル版の構造拘束度尺度との相関関係を検討している。日常生活におけるフォーカシング的経験（上西，2011）とは、特に体験過程を吟味したり確認したりするための時間や空間をどの程度持っているか、また思いつきや閃きといった日常生活

改訂構造拘束度尺度の妥当性に関する追加検証（高沢）

で生じるシフト体験の要素を既存のフォーカシング的態度へ追加したものと言えよう。相関分析の結果、「体験の感受」・「体験過程の受容と行動」・「間が取れている」因子それぞれと反復性および構造拘束度の総得点との有意な相関が見出されている。一方、傍観性因子は一貫してFESとの関連性が見られなかった。これについて上西（2012）は「『間が取れている』と構造拘束度尺度の『傍観性』では心理的距離の持つ意味が違っている」と指摘している。この他に想定される背景要因としては、オリジナル版の傍観性因子が5項目と少なく、測定の実在性に不足があった可能性を否定できない。本研究においてはまず、FMS-18を用いてフォーカシング的態度とSSBE-Rとの相関関係を検証することとし、FESとの相関関係の検証は他の研究に譲ることとする。

続いて、構造拘束的な体験様式は反すうとの関連性が指摘されている（高沢, 2016）。特に反復性因子は反すう（抑うつやその原因、意味、結果に対して繰り返し受動的に注意が焦点づけられる反応様式; Nolen-Hoeksema, Wisco, & Lyubomirsky, 2008）と概念レベルだけでなく、行動そのもののレベルで類似している。実際に、前述のようにオリジナル版とネガティブな反すう傾向尺度（伊藤・上里, 2001）との有意な正の相関が見られている（高沢, 2016, Study 2）。改訂版においても構造拘束度と反すう傾向との相関関係が見られれば、併存的妥当性をさらに確認することとなる。特に、傍観性因子は構造拘束度尺度の改訂時に従来の5項目から8項目へと項目数が追加・修正されている（高沢, 2018）。そのため今一度ネガティブな反すう傾向と傍観性との関連性を検討することは、併存的妥当性の確認の上で重要となる。

予測的妥当性については、一般に、測定される概念が時間的に隔絶して測定された他の概念との相関関係によって検証される。本研究では解離性体験尺度（Dissociative Experiences Scale-II; DES-II, Carlson & Putnam, 1993; 田辺・小川, 1992）を用いる。DSM-5（American Psychiatric Association [APA], 2013, p. 291）の定義によると、解離とは「意識、記憶、同一性、感情、近く、身体表象、運動制御、および行動の正常な統合の途絶や非連続性」であり、離人感とは「自分の考え、自己、身体についての現実感のなさ、もしくは離脱感」である。傍観性因子（高沢, 2018）のように、「自分のことでも現実味がなく

改訂構造拘束度尺度の妥当性に関する追加検証（高沢）

感じられる」、「自分のことでも、傍観者になっている傾向がある」、「いろいろな体験をしても、実感をもって感じられないほうである」、「自分の感情が分からないほうである」等、表層的には解離性障害のうち離人症的な側面を一部捉えていると見なすことができる。またトラウマと体験様式との関連が指摘されており（e.g., Scharwächter, 2005）、トラウマと密接な関連のある解離と体験様式とのつながりを検証することは理論的にも貢献のある点であろう。以上の議論から、改訂構造拘束度尺度の得点と DES-II の得点との間には相関関係があると予測される。本研究では DES-II を利用し、測定時期をずらして改訂構造拘束度尺度の予測的妥当性の検証を行う。

以上のように、本研究の目的は SSBE-R の併存的妥当性の追加検証（研究 1）と予測的妥当性の検証（研究 2）の 2 つである。

研究 1

研究 1 では序論における議論をもとに、併存的妥当性の検討を行う。SSBE-R 総得点・下位尺度と FMS-18 総得点・下位尺度は負の相関、SSBE-R 総得点・下位尺度とネガティブな反すう傾向とは正の相関を示すと予測した。なお分析にはフリーの統計解析マクロである HAD（清水, 2016）を用いた²。

方法

1) 調査参加者

参加者は 154 名（女性 70 名）、平均年齢は 19.12 歳（ $SD = 1.07$ ）であった。そのうち、回答に不備のあった 9 名を除外し 145 名（女性 67 名、平均年齢 19.01 歳、 $SD = 1.06$ ）を分析対象とした。

2) 測定尺度

(1) SSBE-R（高沢, 2018）・・・2 因子構造（反復性 8 項目、傍観性 8 項目）

であり、合計 16 項目であった。

(2) FMS-18（森川・永野・福盛・平井, 2014）・・・3 因子構造（注意 6 項

2 研究 2 も同様。

改訂構造拘束度尺度の妥当性に関する追加検証（高沢）

目、受容 6 項目、距離 6 項目）であり合計 18 項目であった。

(3) ネガティブな反すう傾向尺度（伊藤・上里, 2001）…第 1 因子である「ネガティブな反すう傾向」6 項目を用いた。

なお参加者の利便性を考慮し、研究 1 における選択肢はすべて「1. 全く当てはまらない」～「7. 非常に当てはまる」の 7 件法に統一した。

3) 手続き

参加者は研究目的・倫理的配慮等について熟読し、書面・口頭の両方によってインフォームド・コンセントを得た後、質問紙に回答した。尺度の実施順序、および尺度内の質問項目の順序はカウンターバランスを取った。回答終了後、その場で用紙を回収し、デブリーフィングを行った。

結果

1) 記述統計量、正規性検定、および信頼性係数

まず記述統計量を算出した後、コルモゴロフ・スミルノフ検定を用いて正規性を確認した（Table 1）。その結果、反復性を除いた測定変数において正規性を仮定できるとは言えなかった。このため、後述の相関分析ではノンパラメトリックデータに対応したスピアマン相関を用いて検討を行った。また測定尺度得点の α 係数、 ω 係数を算出した（Table 2）。その結果、反復性、傍観性、および SSBE-R 総得点ともに十分な値を示した。

2) 変数間の相関分析

SSBE-R の併存的妥当性の検討のため、SSBE-R と他の変数との相関分析を行った（Table 3）。その結果、反復性は注意（ $r = .225, p < .01$ ）、受容（ $r = -.264, p < .01$ ）、距離（ $r = -.332, p < .01$ ）、FMS-18 総得点（ $r = -.193, p < .05$ ）、およびネガティブな反すう傾向（ $r = .705, p < .01$ ）との有意な相関が見られた。傍観性は受容（ $r = -.256, p < .01$ ）、FMS-18 総得点（ $r = -.165, p < .05$ ）、およびネガティブな反すう傾向（ $r = .260, p < .01$ ）との有意な相関が見られた。SSBE-R 総得点は受容（ $r = -.326, p < .01$ ）、距離（ $r = -.195,$

改訂構造拘束度尺度の妥当性に関する追加検証（高沢）

$p < .05$)、FMS-18 総得点 ($r = -.225, p < .01$)、およびネガティブな反すう傾向 ($r = .586, p < .01$) との有意な相関が見られた。傍観性と注意・距離との相関は有意ではなかった ($rs = -.017 \sim .125, ps > .13$)。

表 1 研究 1 における記述統計量と正規性検定

変数名	平均値	SD	歪度	尖度	コルモゴロフ・スミルノフ検定		
					統計量	p 値	補正 p 値
反復性	37.959	8.809	-.381	.144	.063	.609	.168
傍観性	29.228	7.817	-.250	-.224	.086	.231	.010
SSBE-R 総得点	67.186	13.821	-.776	.807	.115	.042	<.0001
注意	23.793	6.064	-.030	-.436	.079	.324	.027
受容	24.572	6.217	.394	.125	.070	.476	.079
距離	25.069	5.326	-.033	.251	.073	.425	.057
FMS-18 総得点	73.434	12.670	.213	.091	.057	.743	.309
ネガティブな反すう傾向	28.131	10.043	.002	-.717	.064	.597	.159

Note. 全て 7 件法で測定

表 2 研究 1 における信頼性係数

	α 係数	95% 下限	95% 上限	ω 係数
反復性	.859	.821	.891	.865
傍観性	.779	.721	.830	.783
SSBE-R 総得点	.850	.812	.884	.847
注意	.795	.738	.842	.795
受容	.766	.701	.820	.770
距離	.638	.539	.722	.627
FMS-18 総得点	.797	.746	.842	.789
ネガティブな反すう傾向	.920	.899	.939	.924

表 3 研究 1 における相関分析結果

	注意	受容	距離	FMS-18 総得点	ネガティブな反すう傾向
反復性	.225 **	-.264 **	-.332 **	-.193 *	.705 **
傍観性	-.017	-.256 **	.008	-.165 *	.260 **
SSBE-R 総得点	.125	-.326 **	-.195 *	-.225 **	.586 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

研究 2

研究 2 では SSBE-R の予測的妥当性の検証のため、研究 1 の 4 週間後に DES- II の測定を行った。4 週間前に測定された SSBE-R 総得点・下位尺度と 4 週間後に測定された DES- II 総得点・および下位尺度とは正の相関があると予測した。

方法

1) 調査参加者

研究 1 において分析対象とした 145 名（女性 67 名、平均年齢 19.01 歳、 $SD = 1.06$ ）のうち、4 週間後の DES- II のみの調査においても不備のなかった 131 名（女性 61 名、平均年齢 19.05 歳、 $SD = .99$ ）を分析対象とした。

2) 測定尺度

(1) DES- II (Carlson & Putnam, 1993; 田辺・小川, 1992)・・・ Carlson & Putnam (1993) による 3 因子構造（健忘 8 項目、没頭 9 項目、離人症 6 項目）であり、合計 23 項目であった。他の研究 (e.g., 猪飼・大河原, 2013) では DES- II を 1 因子構造と解釈する向きもあるが、Carlson and Putnam (1993) のうち臨床サンプルを対象としたデータの因子構造では、明確に離人症因子と他の因子とが分けられており、本研究ではこの 3 因子構造によって測定することを選択した。各質問の内容について、アルコールや薬を飲んでいる場合を除いた日頃の経験を、「0. ここ数年、まったくそのような経験（感覚）はない」～「100. ここ数年（あるいは記憶にある限り）ずっと、そんなことは日常であり、それが普通だと思う（誰もがこういう経験をしているものだと思う）」の 10 点刻みによる 11 件法によって尋ねた。

結果

1) 記述統計量、正規性検定、および DES- II の信頼性係数

Table 4 に示した通り、研究 1 と同様、複数の変数で正規性が仮定できなかった。そのため、後述の相関分析においてもノンパラメトリックデータに対応し

改訂構造拘束度尺度の妥当性に関する追加検証（高沢）

たスピアマン相関を用いることとした。DES- IIの信頼性係数は十分な値を示した（Table 5）。

2) 変数間の相関分析

SSBE-Rの予測的妥当性の検討のため、SSBE-RとDES-IIとの相関分析を行った（Table 6）。その結果、反復性と没頭との間に有意な相関（ $r = .174, p < .05$ ）が見られ、離人との相関は有意傾向（ $r = .158, p < .10$ ）であった。傍観性と健忘との相関は有意傾向（ $r = .160, p < .10$ ）であり、没頭（ $r = .188, p < .05$ ）、離人（ $r = .217, p < .05$ ）、およびDES-II総得点（ $r = .186, p < .05$ ）とは有意な相関が見られた。SSBE-R総得点と没頭（ $r = .209, p < .05$ ）、離人（ $r = .225, p < .05$ ）、およびDES-II総得点（ $r = .193, p < .05$ ）との間の相関は有意であった。反復性と健忘・DES-II総得点、およびSSBE-R総得点と健忘との相関は有意ではなかった（ $r_s = .036 \sim .139, p_s > .11$ ）。

表4 研究2における記述統計量と正規性検定

変数名	平均値	SD	歪度	尖度	コルモゴロフ・スミルノフ検定		
					統計量	p値	補正p値
反復性	38.252	8.799	-.380	.180	.055	.815	.416
傍観性	29.328	7.943	-.258	-.182	.076	.441	.063
SSBE-R 総得点	67.580	13.777	-.825	1.080	.123	.038	.000
健忘	45.878	70.698	2.425	7.224	.276	.000	.000
没頭	126.107	116.840	1.661	2.761	.171	.001	.000
離人症	45.267	72.029	2.690	8.686	.225	.000	.000
DES-II 総得点	217.252	230.581	2.087	5.379	.189	.000	.000

表5 研究2における信頼性係数

	α 係数	95% 下限	95% 上限	ω 係数
健忘	.744	.672	.805	.745
没頭	.801	.745	.848	.811
離人症	.765	.696	.822	.766
DES-II 総得点	.897	.869	.921	.902

Note. SSBE-Rについては省略

改訂構造拘束度尺度の妥当性に関する追加検証（高沢）

表 6 研究 2 における相関分析結果

	健忘	没頭	離人症	DES- II 総得点
反復性	.036	.174 *	.158 *	.139
傍観性	.160 *	.188 *	.217 *	.186 *
SSBE-R 総得点	.115	.209 *	.225 **	.193 *

* $p < .10$, ** $p < .05$, *** $p < .01$

考察

（1）併存的妥当性の追加検証について

まず併存的妥当性については FMS-18 とネガティブな反すう傾向との相関関係によって検証を行った。その結果、SSBE-R と FMS-18、およびその下位尺度同士の相関分析の結果、反復性と注意との有意な正の相関が見られた。この結果は表面上、構造拘束的な体験様式とフォーカシング的態度という理論的には相反する変数同士の関係性としては、予測と矛盾するように見える。しかしながらこの結果はそれほど単純ではなく、その背景要因としては、両者に自己の内面への意識（私的自己意識；辻，1993）という共通点があり、潜在因子として存在するためではないかと考えられる。反復性は序論で述べた通りネガティブな自己の内面へと注目する体験の仕方であり、注意はニュートラルまたはポジティブな態度で自己の内面への注目を行う様子を捉えた変数である。いずれにしても、自己の内面への意識に関するものであるため正の相関が見られたと考えられる。また類似の結果として、上西（2012）では反復性と FES の体験の感受因子との正の相関が見られている。体験の感受の質問内容からは、悩みを想起した際の身体感覚の賦活の様子が見て取れる。こういった自己の内面に注意を向けることや身体感覚の賦活に関しては、私的自己意識の観点から今後の研究の課題として取り上げることが可能であろう。ただし、体験の感受は私的自己意識の他にも、あくまで質問項目の内容から、いわゆる心身症的側面を含んでいると解釈できるかもしれない。そのため、反復性と正の相関が見られた変数に関しては、単に私的自己意識という（仮想的）共通点だけではなく、より多角的な視点が必要であろう。

一方、反復性と受容・距離・FMS-18 総得点との相関係数は有意となった。これについては理論的な予測と一致する。体験様式が反復的になったために受

改訂構造拘束度尺度の妥当性に関する追加検証（高沢）

容因子のように「自分の内面にどんな感じがあっても大丈夫」と思えないか、そう思えないから特定の考えが頭の中で反復されるのか、あるいは両方の可能性がある。同様に、反復性が悩みとの距離を取れなくさせるか、距離が取れなくなったがために反復的な体験様式となるか、あるいはこれらの双方向的な影響関係が背景にあっても矛盾はない。反復性と FMS-18 総得点との相関が負の相関となったのは、受容や距離といった因子との相関関係に影響されての結果と考えられる。

傍観性と FMS-18 との相関関係に着目すると、有意な負の相関が見られたのは傍観性と受容、および傍観性と FMS-18 総得点のみであった。傍観性は自己の実感から離れた、あるいは実感が無い状態を示すが、受容はその実感を得ていることが前提となっている。そのため負の相関が生じたと考えられる。傍観性と注意との相関は見られなかったが、この結果の解釈としては例えば注意因子の「生活の中で、自分の内側に落ち着いて注意を向ける時間を持っている」としても、自己の実感があったりなかったりする可能性があるということになる。これはまさに、単に自己の内側に注意を向けるだけが重要ではなく、その仕方やあり方、つまり体験様式が重要な決定因となっていることを暗に示しているのではないだろうか。次に傍観性と距離との無相関についてであるが、これらは上西（2012）も指摘しているように、これらの変数が反映する距離の意味が異なるためと考えられる。

上西（2012）では一貫して FES と傍観性（5 項目）と他の変数との相関が見られなかったが、一方で本研究では、改定された傍観性（8 項目）を用いることによって受容や FMS-18 総得点との有意な相関が見られた。勿論、FMS-18 と FES という相違はあり単純に断定はできないが、傍観性との有意な相関が改定による測定精度の向上に帰属される可能性は否定できない。ただし、これについてはさらに直接 FES と SSBE-R との相関関係を検証する必要があるであろう。

続いて SSBE-R とネガティブな反すう傾向、およびその下位尺度同士の相関分析の結果、すべての変数同士で有意な正の相関が見られた。これは高沢（2016）が指摘したように、ネガティブな反すう傾向によって構造拘束的な

改訂構造拘束度尺度の妥当性に関する追加検証（高沢）

体験様式が説明可能であるという点と一致する。ただし、反復性と傍観性を比較すると、ネガティブな反すう傾向に対する予測力には開きがある。実際に、相関係数の差の検定をしたところ、反復性とネガティブな反すう傾向、傍観性とネガティブな反すう傾向との相関係数の間に有意な差が見られた ($z = 5.056$, $p < .0001$)。この相関係数の大きさの差の背景には、傍観性がいわゆる反すうと分散を共有している部分がありつつも、実感のなさや自分の体験に対して外野的視点で眺めている状態を捉えた、性質の異なる独立した概念であることを示している。このように、一貫して SSBE-R とネガティブな反すう傾向との正の相関が見られたことは、SSBE-R の併存的妥当性をさらに保証するものである。

以上のように、一部の例外はあったものの全体としては予測通りであった。したがって SSBE-R の併存的妥当性の追加検証は十分な結果と見てよいであろう。ただし、因子ごとの関係性を細かく見ると必ずしも完全な対極にある概念とは言い切れず、これについては他の潜在変数等の影響による、より複雑な関係性の存在が示唆された。

（2）予測的妥当性の検証について

研究 1 の時点から 4 週間後に DES- II によって解離性障害得点を測定し、両者の相関関係を検討した。その結果、SSBE-R と DES- II、およびその下位尺度同士の相関分析の結果、複数の変数間で有意な正の相関が見られた (Table 6)。特に傍観性と離人症との正の相関関係については、本研究の予測と一致する結果である。これは例えば傍観性の項目で「自分のことでも、現実味がなく感じられる傾向がある」や「自分のことでも、傍観性になっている傾向がある」に代表されるような離人症的一側面を捉えた項目が、DES- II の離人症因子の内容と概念的に類似しており生じた相関関係と考えられる。また、この他の下位尺度同士の有意な相関関係について本研究においては明確な予測を置いていないものの、精神病は個人の体験様式が構造拘束的 (Gendlin, 1964, p.33) な場合であるという知見と矛盾しない結果であった。総じて、研究 2 では研究 1 の SSBE-R 他 の測定から 4 週間後に測定が行われたものであるが、時間的に

改訂構造拘束度尺度の妥当性に関する追加検証（高沢）

隔絶した他の変数の得点予測が可能という点で、SSBE-R は予測的妥当性を持つと考えられる。

（3）本研究の限界と今後の課題

本研究で追加検証することのできた妥当性の側面は併存的妥当性と予測的妥当性である。一方で SSBE-R が検証を経ていない妥当性の他側面については弁別的妥当性と収束的妥当性が挙げられる。まず弁別的妥当性の検証には、一般にその尺度で測定しようとする概念と理論的に関連がないと想定される概念との相関関係（無相関）を用いる。弁別的妥当性が示されれば、反復性や傍観性が他のどの概念と切り分けられるのかが明らかとなる。このことは理論的、臨床実践的に意義のあることといえよう。また収束的妥当性の検証には、一般にその尺度で測定しようとする概念と同じ概念との相関関係を用いるが、現在のところ高沢・伊藤（2009）および高沢（2018）以外の研究で、構造拘束度を測定する尺度を開発した研究は見当たらない。尺度の利用可能性を高めるためにも、多面的な妥当性の検証が必要であろう。これら 2 つの未検討の妥当性の検証は後発の研究に譲りたい。

引用文献

- American Psychiatric Association. (2013). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders* (5th ed.). Washington, DC: Author.
- Carlson, E. B., & Putnam, F. W. (1993). An update on the Dissociative Experiences Scale. *Dissociation: Progress in the Dissociative Disorders*, 6, 16-27. <https://psycnet.apa.org/record/1994-27927-001>
- 福盛英明・森川友子. (2003). 青年期における「フォーカシング的態度」と精神的健康度との関連「体験過程尊重尺度」(The Focusing Manner Scale; FMS) 作成の試み. *心理臨床学研究*, 20, 580-587. <https://ci.nii.ac.jp/naid/40005722773>
- Geiser, C. (2010). Moments of Movement: Carrying forward structure-bound process in work with clients suffering from chronic pain. *Person-Centered and Experiential Psychotherapies*, 9, 95-106. <https://doi.org/10.1080/14779757.2010>

改訂構造拘束度尺度の妥当性に関する追加検証 (高沢)

.9688510

- Gendlin, E. T. (1964). A theory of personality change. P. Worchel & D. Byrne. Eds., *Personality change*, 100-148. John Wiley & Sons. http://previous.focusing.org/pdf/personality_change.pdf
- Gendlin, E. T. (1981). *Focusing 2nd Ed.* Toronto: Bantam Books.
- 猪飼さやか・大河原美以. (2013). 母からの負情動・身体感覚否定経験が自傷行為に及ぼす影響: 解離性体験尺度 DES-II との関係, 東京学芸大学紀要. 総合教育化学系, 64, 171-178. <http://hdl.handle.net/2309/132592>
- 伊藤拓・上里一郎. (2001). ネガティブな反すう尺度の作成およびうつ状態との関連性の検討. *カウンセリング研究*, 34, 31-42. <https://ci.nii.ac.jp/naid/40004725882>
- 森川友子・永野浩二・福盛英明・平井達也. (2014). FMS (The Focusing Manner Scale) 改訂版の作成および信頼性と妥当性の検討, 九州産業大学国際文化学部紀要, 58, 117-135. <https://ci.nii.ac.jp/naid/40020224215>
- 中谷隆子・杉江征. (2014). 日常的フォーカシング態度尺度の開発およびその信頼性・妥当性の検討—内的プロセスモデルの検証—. *心理臨床学研究*, 32, 250-260. <https://ci.nii.ac.jp/naid/40020151173>
- Nolen-Hoeksema, S., Wisco, B., & Lyubomirsky, S. (2008). Rethinking rumination. *Perspectives on Psychological Science*, 3, 400-424.
- Prouty, G. (2004). Pre-therapy and pre-symbolic experiencing: Evolutions in experiential approaches to psychotic experience. *International Gestalt Journal*, 27, 59-84.
- Scharwächter, P. (2005). The integration of focusing-oriented psychotherapy into the three-phase model for the treatment of post-traumatic stress disorder. *Person-Centered & Experiential Psychotherapies*, 4, 4-19. <https://doi.org/10.1080/14779757.2005.9688364>
- 末武康弘. (1986). 人格およびその変化をめぐる理論的課題—ロジャーズ派人格理論の推移の検討を中心として—. *教育方法学研究*, 7, 139-159. https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=23499&file_id=17&file_no=1
- 清水裕士. (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育,

改訂構造拘束度尺度の妥当性に関する追加検証 (高沢)

- 研究実践における利用方法の提案. メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73. <http://hdl.handle.net/11150/10815>
- 高沢佳司・伊藤義美. (2009). 構造拘束度尺度の作成および妥当性・信頼性の検討. 心理臨床学研究, 27, 603-611. <https://ci.nii.ac.jp/naid/40016946521>
- Takasawa, K. & Ito, Y. (2011). Experiential manner as a mediating factor between clearing a space and self-efficacy. *Person-Centered & Experiential Psychotherapies*, 10, 105-115. <https://doi.org/10.1080/14779757.2011.576558>
- Takasawa, K., Kaneda, M., & Tsuda, H. (2019). Psychological distance reduces structure-bound experiencing and emotional reactivity. *Person-Centered & Experiential Psychotherapies*, 18, 66-84. <https://doi.org/10.1080/14779757.2019.1571434>
- 高沢佳司. (2016). 構造拘束的な体験様式と心理的距離に関する研究. 博士学位論文 (法政大学). <http://doi.org/10.15002/00012938>
- 高沢佳司. (2018). 構造拘束度尺度の改訂および妥当性・信頼性の検討. 愛知学泉大学・短期大学紀要, 53, 81-91. <http://id.nii.ac.jp/1155/00001026>
- 田辺肇・小川俊樹. (1992). 質問紙による解離性体験の測定－大学生を対象にした DES (Dissociative Experiences Scale) の検討－. 筑波大学心理学研究, 14, 171-178. <http://hdl.handle.net/2241/13354>
- 辻平治郎. (1993). 自己意識と他者意識. 北大路書房
- 上西裕之. (2011). 日常生活におけるフォーカシング的経験の構造に関する一考察－フォーカシング的経験尺度の開発とその構造の分析－. 関西大学心理臨床カウンセリングルーム紀要, 2, 91-100. <http://hdl.handle.net/10112/4887>
- 上西裕之. (2012). 日常生活におけるフォーカシング的態度と構造拘束度との関連. 関西大学心理臨床カウンセリングルーム紀要, 3, 65-73. <http://hdl.handle.net/10112/8023>

改訂構造拘束度尺度の妥当性に関する追加検証 (高沢)

An Additional Examination of the Validity of the Scale for Structure-bound Experiencing-Revised.

Keiji TAKASAWA (Kogakkan University)

Abstract

Research on the Scale for Structure-bound Experiencing-Revised (SSBE-R) has confirmed some aspects of the scale's validity, specifically the content, convergent, clinical, and factorial validity. However, there are two unanswered questions: (a) In terms of additional evidence for concurrent validity, does SSBE-R predict the focusing manner? (b) Does SSBE-R also have predictive validity, i.e., are scores on this scale correlated with dissociative symptoms measured at another time? To address these questions, two questionnaire surveys were administered 4 weeks apart: the initial (Study 1) and the second (Study 2) assessment. In Study 1, 145 participants completed the SSBE-R, Focusing Manner Scale-18, and Rumination Trait Scale. Apart from some exceptions, the results showed that most items in these scales and their subscales were significantly correlated with each other. In Study 2, 131 participants completed both assessments. Results showed that SSBE-R scores for the initial assessment were significantly correlated with dissociative symptoms at the second assessment. Thus, in addition to offering further evidence of the concurrent validity of the SSBE-R, these results also provided confirmation of its predictive validity. The theoretical contributions and limitations of the study are discussed, as well as future directions.

Keywords : the scale for structure-bound experiencing-revised, validity, structure-bound manner, focusing manner